ガラテア書の修辞学的分析（1）
——プロギュムナスマタの新しい視点から見て*——

山　田　耕　太

Ⅰ．研究史的回顧

近年の新約聖書の修辞学的研究は、ハンス・ディーター・ベッツのガラテア書の研究ならびに註解書から始まった[1]。それを起点にして、現在では新約聖書の修辞学的研究がおびただしいほどなされている。それは古代から中世・宗教改革を経て、近世まで行なわれていた修辞学的釈義の伝統を復権することになったが[2]、近代以降の聖書学の研究を経た上での修辞学の復権であり、近世以前の聖書解釈に戻ることを意味するのではない。

それ以来、ガラテア書の修辞学的分析が盛んに行なわれているが、現在までの研究は多岐に亘り、かつ錯綜している。だが、整理すると主に以下の論点を巡って議論が展開されている。第一にガラテア書の構造分析とその修辞学的ジャンルの問題について、第二に分析のモデルないしは分析資料の問題について、第三にこれらの議論と関連した各論への展開について、第四に方法論的懐疑を含めて修辞学的分析の限界についてである[3]。

1．ガラテア書の構造分析と修辞学的ジャンル

ベッツ以来最も議論が展開されてきたのは、この分野である。ベッツはガラテア書を「法廷弁論」（dikanikon, iudiciale; forensic）の下位ジャンルである「弁明」(apologetikon, defensio; apologetic)と密接に関連する「弁明の書簡」と分類した。それに対して、ジョージ・ケネディらは「議会弁論」(symbouletikon, deliberativum; deliberative)であると反論した。両者を折衷する立場や「演示弁論」(epideiktikon, demonstrativum; epideictic)との関連を指摘する立場も現われた。

（1）「法廷弁論」または「弁明」

J.B.ライトフット以来、ガラテア書は１－２章・３－４章・５－６章に大きく三つに分けて解釈されてきた[4]。ベッツも新しい分析方法を取り入れたのではあるが、基本的にはこの三区分を新しい視点で追認したのである。その際に、１－４章を修辞学の「弁明」の議論と分析したのではあるが、５－

６章の分析では困惑して「パラネーゼ」(paranesis)という伝統的な解釈を継承して書簡理論の「勧告」(exhortatio)に相当すると分析した[5]。

しかし、古代では修辞学と書簡理論は区別されており、修辞学的批評の中に書簡理論の概念を持ち込んで混同したことは、すぐにハンス・ヒュブナーやヨアキム・クラッセンらによって批判された[6]。また、2:11－21を連続した議論と見なす伝統的な解釈と異なって、ルター派の信仰義認論を強調する立場と密接に関連するのであるが、信仰義認が最初に言及される2:15－21を議論の争点とする「命題」(propositio) として分析した。ここも後に議論が分かれる点になった。さらに、ベッツは1:12－2:14を「陳述」(narratio) に位置づけたが、これに対してヴィルヘルム・ヴェルナーは「陳述」ではなく第一の「論証」(argumentatio) の個所であり、「論証」は1:12－6:10まで続くと位置づけ直した[7]。

これに対して、ジェームズ・ヘスターは、基本的にはベッツの議論の枠組みを受け入れたが、１－２章に関してスタシス理論の解釈を採用して1:11－12はベッツの言う「移行」(transitio) ではなく「スタシス」(stasis)であり、「移行」は1:13－14であると分析した。また2:11－14は、「陳述」を補足する「逸脱」(digressio, egressus) と分析し、ベッツ理論を細部において修正しようとした[8]。しかし、ヘスターは後に2:11－14を「クレイア」と考え、次第に１－２章の「陳述」に非難と称賛の要素を見出していった[9]。

他方、トロイ・マーティンは、ガラテア人に対するパウロの非難を異なる福音へ移ろうとする個所（1:6－9）ばかりでなく、異教の習慣に戻ろうとする個所（4:8－11）にも見出して、ガラテア書全体をスタシス理論で解明し徹底させる[10]。また、ヴェルナーと似て、1:10－6:10を修辞学的議論として分析するのであるが、その分析は唯一と言っていいほど修辞疑問に注意を払って段落分けを行なっている。マーティンの分析はベッツとは全く異なる視点で解明されているのであるが、修辞学のジャンルに関しては、ベッツの「法廷弁論」の「弁明」に属することを支持している。

（２）「議会弁論」

ケネディはベッツのガラテア書の修辞学的分析が５－６章の分析で躓いて一貫していないことをいち早く見通した。そして5:1－6:10の勧告は、この書簡が実際には「議会弁論」の有力な証拠であることを見抜いた。「法廷弁論」では過去の行為について弁護したり、攻撃したりするのであるが、「議会言論」では将来の行動について勧めるか、阻止するかを決定するために議論されるのである。すなわち、ガラテア書ではパウロの使徒職や福音の弁明とい

う過去の行為が問題になっているのではなく、ガラテア人が、近い将来に割礼を受けるか否かという差し迫った問題に決着をつけようとする議論であるので、「議会弁論」のジャンルに属すというのである。そして、1:10－6:10を一貫した議論（1:10－5:1）と勧告（5:2－6:10）で構成されていると分析する[11]。

ロバート・ホールも、ケネディの分析を同様に支持して、1:10－6:10が一貫した議論であることを示し、ガラテア書全体で「議会弁論」の性格を持つことを明らかにする。その際に、1:6－9は「序論」ではなく「命題」に位置づけられ、1:10－2:21は「論証」の中での「陳述」に位置づけられ、「論証」と「陳述」の二重の性格を持つとされる[12]。フランク・マテラ、ベン・ウィザリントン、フランソワ・ヴォーガの註解書もケネディやホールと同様に「議会弁論」という立場に立つ[13]。

ヨープ・シュミットもガラテア書が議会弁論の性格を持つことを指摘するが、「それはガラテア人が選択しなければならない二つの生き方を提示する。パウロは、過去の事実を描いて自分自身の生き方を勧め、論敵が彼らに求める変化を紹介することで彼らを落胆させる[14]」。しかし、シュミットは大胆にも「勧告」の部分（5:13－6:10）が後から追加された挿入個所であると主張するが、写本などの状況からその可能性はありえない。むしろこのような仮定は、議会弁論の視点からも「勧告」の取り扱いの難しさを示唆するのである。

最後に、この類型の議論と関連して、ヨーハン・ヴォスは、1:10－5:12をケネディと同様に確信を与えるための「論証」（confirmatio）であるとする。とりわけ1－2章の修辞学的分析では、1:6－9は聴衆や読者に議論に対して前もって準備させる「序論」ではなく、対立した議論の「命題」（propositio）であると位置づけ直す。さらに、1:10－12は「命題」ではなく、「説得推論に基づいた論証」であり、1:13－2:14（21）は、「陳述の要素を持った論証」であるとする。だが、修辞学のジャンルに関しては、ケネディらの「議会弁論」に位置づけず、メランヒトンに基づいて「教示的」（didactic）弁論に分類する[15]。

（3）折衷案

一方のベッツを中心とした「弁明の書簡」説は、1－4章の議論については展開できるが、5－6章については同じ議論を一貫して展開していくことは困難である。他方、5－6章の問題を克服するためにケネディらはガラテア書の議論が「議会弁論」であることを表明したが、両者の見解を採用して、

「法廷弁論」と「議会弁論」の組み合わせを考える立場も現われた。

例えば、リチャード・ロングネッカーによれば、1:6－4:11は「非難のセクション」であり「法廷弁論」が支配的であり、4:12－6:10は「要求のセクション」であり「議会弁論」が支配的である[16]。また、キール・モーランドによれば、1:13－4:11までは「法廷弁論」による議論であり、5:1－6:10は「議会弁論」によると分析される[17]。さらに、シューン＝ヤンセンによれば、1－2章は「弁明的」であり、5:13－6:18は「議会弁論的」であり、3:1－5:12は「議会弁論的」であると同時に「演示弁論的」であると判断される[18]。

しかし、折衷案は一貫した修辞学の論理で展開されておらず、基本的にはベッツの問題点の克服にはなっていない。

（4）「演示弁論」

既に指摘したように、ヘスターは次第に「非難」と「称賛」のモティーフを１－２章に見出していった。すなわち、パウロの「驚き」（1:6）に「非難」が見られ、パウロの回心でユダヤの教会が神を称える「称賛」（1:21）が見られるばかりでなく、1:11－2:14の構造自体が称賛文の構成であることを指摘する[19]。

２．ガラテア書の修辞学的分析のモデルと資料

以上のほとんど全ての議論は、ガラテア書の分析をギリシア・ローマの修辞学に範を求めて分析している。その分析の資料は、アリストテレスの『弁論術』に端を発するアクシメネスの『アレクサンドロス宛修辞学』、コルニフィキウスに帰される『ヘレンニウス宛修辞学』、キケロの修辞学の著作『構想論（発想論）』『弁論家』『弁論家について』『弁論術の分析』『ブルータス』、クィンティリアーヌス『弁論家の教育』などの弁論術・修辞学のハンドブックの類である。とりわけ、用いられているのは『ヘレンニウス宛修辞学』キケロの『構想論』、クィンティリアーヌスである。また、スタシス理論を用いる場合には、ヘルモゲネスのテキストならびに『ヘレンニウス宛修辞学』とキケロ『構想論』の該当個所などを用いる。さらに、現代レトリックを併用する立場であると、これらに加えて、ペレルマンならびにオルブレヒツ＝テテュカの『新しいレトリック』などを補って用いる。

例外的に、ロバート・ホールは、ギリシア・ローマの修辞学とは異なって、エチオピア語エノク書、ヨベル書などのユダヤ教黙示文学の修辞学を再構成してガラテア書の論理を解明しようと試みる[20]。キール・モーランドは1:8－9の呪詛と3:10、13の「呪い」の背景をヘブライ語聖書や70人訳聖書を

始めとしてヘブライ的伝統に深く分け入るが、基本的にはギリシア・ローマの修辞学の論理を用いている[21]。現代レトリックに関して、ポール・コパックは、ケネス・バークの「アイデンティフィケーション」理論に基づいた文学的修辞学を用いて、特に1:13－2:14の自伝的陳述を解明しようとする。すなわち、パウロと論敵の対立をパウロはドラマ化して提示し、パウロが自己の過去の出来事を物語ることを通して創出した修辞学的コミュニティに、ガラテア人が割礼への態度如何によって加わるか否かを迫ると解釈する[22]。

3．ガラテア書の各論への展開

各論では、修辞学的批評を用いた議論が多岐に展開しているので、ここでは論敵の問題、律法の問題、神学の問題に限って、その代表的な研究を取り上げて言及したい。

（1） 論敵の問題

ガラテア書におけるパウロの論敵の問題は、ジョン・バークレーの論文以後、新しく展開している[23]。だが、レイトガンが論敵の問題を「修辞学的状況」の問題として捉え、それを修辞学的議論との関連で「論証的状況」として問い直すことによって、さらに深まりを見せている。バーナード・レイトガンによれば、論敵はアブラハムの子孫であることを主張し、ユダヤ的生活習慣に従うようにガラテア人に求めたのである（1:6「別の福音」）[24]。すなわち、ガラテア書ではパウロの使徒職が問題になり、それに対してパウロが弁護しているのではない。このような誤解はコリント書を読む目でガラテア書を読んでいることになるのである[25]。

また、ドュ・トーによれば、論敵と密接に関連する表現である「偽善」(2:13)、「偽兄弟」(2:4)、「(妖術のように）惑わす」(3:1)、倫理的堕落を示唆する表現（6:12-13, cf.2:4)、邪道的な表現（1:7, 5:10, 12)、嘲笑的な描写(5:12)、終末論的な威嚇（1:8-9、5:10)、隠された意図の暴露（2:4, 6:13）などは、論敵の歴史的な状況を描写しているのではなく、卑劣に関する修辞的な表現によって描写しているのである[26]。ラウリ・トゥーレンによれば、それらは「誹謗」(vituperatio）というギリシア・ローマの修辞法に分類される[27]。

さらに、マーク・ナノスは書簡理論の分析からガラテア書を「非難の書」とし、「アイロニー」の要素（1:6-7, 8-9, 3:1-5, 4:12-21, etc.）が決定的であることから「アイロニー的非難の書」と分類する。それに修辞学的分析、社会科学的分析などを用いて、パウロの論争相手を「論敵」でも「反対者」でも

なく、「影響者」(influencers)であるとする。そして、「割礼」の問題はユダヤ主義者ないしはユダヤ人キリスト者というキリスト教内部の問題ではなく、ユダヤ教内部の問題、すなわち「改宗者の割礼」の問題であるという[28]。

（2）律法の問題

E.P.サンダース、J.D.G.ダン、ライセネンらの議論によって、律法論が新しく展開され、とりわけ“covenantal nomism”という概念によって、ユダヤ教とキリスト教に契約と信仰という同じ思考の枠組が見られ、両者の連続性が主張されていることについては、ここでは詳しく述べない。

それと密接に関係することになるが、ホングによれば、ガラテア書では律法の下の奴隷とキリストの下の自由という二つの対立する生き方の選択が求められている。それはガラテア書全体で以下のような対立する構造として提示されているのである。すなわち、1:6-10（論敵の福音 vs. キリストの福音）、3:1-14（律法の行ないによる義 vs. キリストへの信仰による義）、3:23-4:7, 4:21-31（律法の下の奴隷 vs. キリストによる子としての自由）、5:1-12（割礼 vs. 信仰）、5:13-6:10（肉 vs. 霊）、6:12-16（割礼 vs. キリストの十字架）、という対立の構造である[29]。

モーランドによれば、パウロの呪詛の言葉（1:8-9）と「呪い」の用語（3:10,13）は密接に関係し、その背後には契約を守る者と破る者に対する祝福と呪いの対立（申27－28章）、ならびに律法を破って契約を破棄する者に対する呪い（申13章）がある。パウロはガラテア人に対して、手紙の冒頭と主要な議論の始めに、呪いの言葉を述べて、論敵の権威とパウロの権威の選択を迫ったのである[30]。

（3）神学の問題

J.D.G.ダンは、パウロ神学を書き始める前に「パウロ書簡が『演示弁論』『議会弁論』その他何であれ、いずれであるかを議論することは、私には全く無意味であるように思われる」と述べた。だが、ガラテア書を始めとして、パウロ書簡は一瞥するだけで明らかであるが、ギリシア・ローマの修辞的表現で満ちている。修辞的表現を修辞的表現として理解しないと、歴史的事実を誤認することになる。この点を警告したのは、トゥーレンである。

トゥーレンは、ブルトマンの「非神話化」の概念をもじって、修辞的表現から歴史的現実に近づき、修辞学から神学を打ち立てる方法を「非修辞化」(derhetorizing) と呼ぶ。そのテスト・ケースとして「ガラテア書を非修辞化する」(Derhetorizing Galatians)[31]。すなわち、トゥーレンはパウロの感情的

な表現である「驚き」(1:6)、厳しい非難の言葉の背後にある怒り（1:8-9, 10, 3:1-5, etc)、ガラテア人に対する個人的な感情の表明（4:12-20）などは、修辞的表現が加味されて誇張され、反対にパウロの論敵の描写は修辞学的「誹謗」によって歪められ、論敵の神学は修辞学的な「対置」によって対立的に描かれていることを指摘する。一言で言えば、パウロの論敵の思想を「律法主義」として対立的に描いているのは歴史的事実の描写というよりは、パウロ自身の修辞的表現に帰されるのである。すなわち、ガラテア書は極めてドラマ化されているのである。このような結果は、神学を構築する入り口にすぎないが、ダンの意図とは反対に、ユダヤ教とキリスト教の連続性を指摘したサンダースとダンの“covenantal nomism”の立場に近づいているのである。

4．修辞学的批評の限界

一方では修辞学的批評が盛んに行なわれており、その成果が得られつつあり、将来への期待が高まっている。しかし、他方ではこれに対していろいろな段階で方法論的な疑問を抱いている人々もいる。第一に、クラッセンやヒュブナーは、ベッツの註解書に対する批評の中で、ギリシア・ローマの社会では修辞学と書簡理論は異なった分野であり、書かれた手紙である書簡に対して、弁論のハンドブックを分析の道具として用いることに対して疑問を投げかけた。尚、クラッセンは後に自分自身でテトス書の修辞学的分析を行ない、修辞学的批評の論文集まで出したのであった[32]。スタンリー・ポーターやジェフリー・リードも同様な疑問を抱いていた[33]。

第二に、仮にパウロが修辞学の知識があったとしても、果たして修辞学のハンドブックが要求するような高度の修辞学の知識をもっていたのだろうか、あるいは果たしてパウロは専門の修辞学の高等教育を受けていたのであろうか、というフェアウエザーが抱いた疑問である[34]。

第三に、どのような手段であったかは明確でないにせよ、仮にパウロがかなり高度の修辞学の知識を身に付けていたとしても、ベッツが主に分析のモデルや資料として用いたように、紀元94年頃に書かれたクィンティリアーヌスを資料として用いることはできないのではないだろうか、という資料についての疑問である。ベッツの修辞学的批評に賛成したが、方法論的に批判した人が抱いた疑問の一つである。

第四に、仮にパウロがかなり高度の修辞学の知識を身に付けていたとしても、紀元前１世紀というパウロ以前に書かれたローマ時代の修辞学のハンドブックである『ヘレンニウス宛修辞学』やキケロの『構想論』などを分析の

道具として用いることができるだろうか、という疑問である[35]。修辞学ハンドブックに書かれた修辞学の理論と実際に行なわれた演説や実際に書かれた手紙はかなり異なるはずだからである。

第五に、仮にパウロがかなり高度の修辞学の知識を身に付けていたとして、またそれを分析するのにふさわしい道具があったとしても、ギリシア・ローマの修辞学で初期キリストの表現形式やそこに盛られた思想内容を解明することができるのであろうか。修辞学で教育を受け、またキリスト教に回心する以前は修辞学の教師をしていた教父たちであるならばいざ知らず、パウロや新約聖書の書簡を修辞学の概念で分析できるのであろうか。すなわち、「キリスト教とパイデイア」という問題を新約聖書にまで持ち込むことができるのかという疑問である。

II. 方法論的吟味

以下では、プロギュムナスマタを資料として用い、その視点からガラテア書を分析することを試みることにする。その前に、プロギュムナスマタとは何か、またそれを修辞学的分析に用いる意義、プロギュムナスマタの中でガラテア書の分析で有効と思われるコンセプトを論じることにする。

1. プロギュムナスマタとは何か

プロギュムナスマタとは、二つの意味で用いられるが、一方では、「ヘレニズム期から近世に至るまでヨーロッパの学校で実践された、散文の作文と初期の修辞学のために用いられてきた教育のシステムのことである」[36]。すなわち、カリキュラムを意味する。「プロギュムナスマタ」(progymnasmata)は、修辞学的「(諸)訓練」(gymnasma, gymnasia)の「前」(pro)段階のことであり、他方では具体的にヘレニズム期以来の初期教育で用いられてきた作文の練習問題の教則本を意味する。

「プロギュムナスマタ」は何種類もあったことが知られているが、現在まで伝わっているのは4種類である。アレクサンドリアのアエリウス・テオンが1世紀に書いたもの[37]、2世紀のタルソスの修辞学者ヘルモゲネスに帰されるもの[38]、アンティオキアの修辞学者リバニウスの弟子であった4世紀のソフィスト・アフソニウスが書いたもの[39]、コンスタンティノポリスで教えた5世紀のソフィスト・ニコラウスの書いたものである[40]。

4つの「プロギュムナスマタ」に記されたカリキュラムの内容は、テオンに多少の順序の入れ替えが見られるが、ほとんど同じである。すなわち、「寓話」(mythos)、「陳述」(diegesis/diegema)、「クレイア」(chreia)、「格言」

(gnome)、「確証」(kataskeue)、「論駁」(anaskeue)、「共通の場」(topos/koinos topos)、「称賛」(enkomion)、「非難」(psogos)、「比較」(synkrisis)、「性格づくり・人格化」(ethopoeia/prosopopoeia)、「描写」(ekphrasis)、「命題」(thesis)、「法律」(nomos)の14項目で構成されたカリキュラムである。

ただし、テオンにのみ本来のプロギュムナスマタ以前の段階である「朗読」(anagnosis)、「聞き取り」(akroasis)、「置き換え表現」(paraphrasis)、「洗練表現」(exergasia)、「矛盾の指摘（反対命題）」(antirrhesis) について述べられている。また、近世の学校教育まで最も多く用いられてきたアフソニウスにのみ参考のための例文が示されている。さらに、アフソニウスには、9世紀のサルディスのヨハネの註解書を始めとして、いくつかの中世の註解書が残されている。また、ヘルモゲネスのものは最も簡潔にまとめられているが、同じヘルモゲネスが書いた「スタシスについて[41]」というスタシス理論やその他の文体等の教則本、さらにアフソニウスの「プロギュムナスマタ」も含めて、『ヘルモゲネス文書』として後世に伝わっている。

「プロギュムナスマタ」という名称で修辞学への準備教育について言及しているのは、紀元前4世紀に書かれた『アレクサンドロス宛修辞学』(ch.28, 1436a25) である。クィンティリアーヌスはローマ時代の「文法学校」や「修辞学校」で行なわれていたプロギュムナスマタによる作文教育を描いている (1.9; 2.4; 10.5)。また、スエトニウスも「プロギュムナスマタ」と一致する準備教育の項目をいくつか挙げている (Rhet., 1)。また、現存する「プロギュムナスマタ」のカリキュラム内容がほとんど一致していることから、プロギュムナスマタによる教育は紀元前4世紀のヘレニズム時代に既にその原型が形成され、紀元1世紀頃にはギリシア語圏もラテン語圏も含めてローマ社会で広く定着していたものと推定できる[42]。また、プロギュムナスマタの重要な項目は既にアリストテレス『弁論術』や『ヘレンニウス宛修辞学』、キケロ『構想論』の中にも見られることから[43]、このような修辞学のハンドブックから準備教育に必要な項目が選択されたものと考えられる。

プロギュナスマタは全て段階的なカリキュラム構造になっており、H.I.マルーによれば、中等教育として「文法学校」で「寓話」「陳述」「クレイア」「格言」「確証・論駁」が教えられ、高等教育として「修辞学校」で「共通の場」「称賛・非難」「比較」「命題」「法律」が教えられた[44]。このような準備教育を経て、専門の弁論家の教育が行なわれた。すなわち、5世紀以降に追加されたアフソニウスの「プロギュムナスマタ」の序文によれば、「プロギュムナスマタは修辞学の種類や部分の訓練や習練のためであり」、「寓話」「命題」「クレイア」「格言」は「議会弁論」に属し、「論駁」「確証」「共通の

場」は「法廷弁論」に属し、「称賛」「非難」「比較」は「演示弁論」に属す訓練であると考えられていた[45]。また、その9世紀のサルディスのヨハネによるアフソニウスの註解書の序文によれば、「陳述」は「法廷弁論」での「陳述」に、「論駁」「確証」はその「論証」に、「共通の場」はその「結論」の部分の訓練に役立ち、またプロギュムナスマタの目的は多面的であり、「格言」「クレイア」「人格化」「共通の場」はさまざまな部分の訓練に役立つとされた[46]。

2．プロギュムナスマタを新約聖書の修辞学的批評に用いる意義

プロギュムナスマタは、既にその一部は新約聖書の福音書研究で用いられている。すなわち、修辞学的批評として認識は薄いが「クレイア」の研究として用いられている[47]。しかし、書簡の修辞学的批評ではまだ用いられていないので、先に述べた修辞学的批評の限界との関連で、その意義を簡単に述べておきたい。

第一に、従来の修辞学的批評ではギリシア・ローマの修辞学のハンドブックが分析の道具として用いられてきた。そこでは、書き言葉の書簡の分析に話し言葉の修辞学のハンドブックをなぜ用いるのか、という疑問が生じた。これに対して、プロギュムナスマタは修辞学の準備教育であるが、第一義的に書き言葉の作文教育であるので、このような問題は生じない。

第二に、従来の修辞学的批評で用いられてきた修辞学のハンドブックは高度な修辞学の理論が展開されており、パウロはそのような高度の修辞学の専門知識を持っていたのかという疑問が生じたが、プロギュムナスマタは修辞学の準備教育であり、高度な修辞学の知識を前提にしなくても分析の道具として用いることができる。

第三に、プロギュムナスマタは1－5世紀の著作であるが、既にヘレニズム時代に定式化されつつあり紀元前後頃には定着していたと思われるので、1世紀の文書の分析に後から書かれたプロギュムナスマタを用いるのは、時代錯誤ではない。

第四に、従来の修辞学的批評では、修辞学のハンドブックを実際の演説や手紙の分析に用いる際に、理論と実際、理念と実践の間のギャップへの疑問が生じた。プロギュムナスマタは実践的な作文の指南書であるので、両者のギャップはより小さくなるはずである。

第五に、パウロがある程度の修辞学の知識を得ていたとして、またプロギュムナスマタが当時の文書の修辞学的分析にふさわしい道具であるにしても、果たしてパウロがプロギュムナスマタの教育を学校教育ないしはその他

で受けたのであろうか。あるいはプロギュムナスマタの知識をどこかで得たのだろうか。ヘンゲルは、キリスト教徒に回心する以前のパウロが修辞学の知識をどこかで得た可能性を示唆するが[48]、ヴェルナーはもっと積極的にパレスチナのユダヤ教社会が会堂での初等教育やラビの学院という学校教育ばかりでなく、サンヘドリンでの律法の議論、会堂での聖書解釈や神殿・会堂・家庭での祈りに至るまで、多岐に亘ってギリシア・ローマの修辞学の影響を受けていたと指摘する[49]。

3．ガラテア書分析で有効なプロギュムナスマタのコンセプト

以下では、プロギュムナスマタを用いてガラテア書を分析する際に重要な概念となる「確証」、「命題」、「比較」について、その定義により概略を説明する。

（1）「確証」

「確証」（kataskeue）は「論駁」(anaskeue)と対をなすが、テオンが「陳述」(narratio)と「確証」「論駁」を区別せずに叙述しているように[50]、「陳述」と極めて近い。ヘルモゲネスによれば、「『論駁』は提案されたある事柄を覆す言明であり、『確証』とはその反対である[51]」。アフソニウスは、「『論駁』は差し迫ったあることを覆すことである」「『確証』は、差し迫ったあることを証明することである」と述べて、「ダフネについて言われていることは確かでない」という例と「ダフネについて言われていることは確かである」という互いに正反対の例を挙げている。そこでは、最初に問題とされる主張が述べられ、その後に論駁したり確証したりする議論が続く[52]。ニコラウスによれば、「格言の（練習問題の）後に、『論駁』と『確証』が来る。というのは、われわれがかつてクレイアと格言で例示により説得推論により提示をしてきたので、これらは対立した主張のディベートにいかに答えるかをはるかに詳しくわれわれに教え、その結果、論敵の反論に対して解決を提供し、何がわれわれにとって最上であるかを容易に確信させる。さて、『論駁』とは信頼に足るように述べられたことを覆す言明であり、『確証』とはその反対であり、信頼に足りるように述べられたことに確証を提供する言明である[53]」。なお、テオンは「確証」と「論駁」を「陳述」の説明の続けて述べ、明確な定義を述べていない。

（2）「命題」

「命題」（thesis）はテオンによれば、「個人や状況を特定することなしに

論争を認める言葉による探求である」。個人や状況を特定する場合の議論は「仮説」(hypothesis) と呼ばれる。具体的に「人は結婚すべきか」という一般的な対象の議論は「命題」であるが、「ソクラテスは結婚すべきか」という特定の対象の議論は「仮説」になる[54]。ヘルモゲネスによれば、「人々によれば『命題』の定義は、いかなる特定の状況をも離れた、ある主題についての考察のことを意味する[55]」。アフソニウスは、「『命題』とは疑いがかけられているいかなる事柄についての論理的な吟味である」と冒頭で述べ、「『命題』は反対命題と問題の解決を含む最初のプロギュムナスマタである」と解説を加える。そして、「人は結婚すべきか」を例文として挙げる。そこでは、結婚を称賛し、結婚すべきことの議論が続けられた後に、「結婚は不運の原因である」という反対命題が挙げられ、この疑問に対する解決を与える反論が述べられる。続いて、「結婚は女性を寡婦にし、子供を孤児にする」という反対命題が挙げられ、それに対して同様に反論して解決を与える。「結婚はめんどうだ」という反対命題が挙げられ、同様にこの疑問に対して解決を与える反論が述べられ、結びに結婚すべきだという結論に導かれる[56]。最後に、ニコラウスによれば、「『命題』は何かに論理的吟味を認めることであるが、個人や状況について特定することなしにする」。そして、このプロギュムナスマタは「議会的 (助言的)」な性格をもつが、注意深く巧みな技法によっては「演示的 (称賛的)」にもなり得ることを指摘する[57]。

(3)「比較[58]」

「比較」(sugrisis)は、テオンによれば、「よりよいもの、あるいはより悪いもの同士を並置する表現である。人間についても事柄についても比較がある」と似たもの同士の比較を念頭にしている[59]。これに対してアフソニウスは対立したものの比較をも加える。「『比較』はものごと同士を並置することによって、より優れたものをそれに比べられるものと一緒に提示することである。比較することによって、優れたものを良いものと、みすぼらしいものをみそぼらしくないものと、良いものを悪いものと、小さいものを大きいものと並べるべきである[60]」。ニコラウスは悪いものと比較すると何かに認められる悪を敷衍して述べる「共通の場」に近づき、良いものと比較すると人やものを称える「称賛」に近づくことを指摘する[61]。

以下では、このようなコンセプトを用いてガラテア書の修辞学的「配列」(dispositio)、すなわち手紙の構造を分析する[62]。

註

* 本稿は2003年9月11-12日に南山大学で開催された日本新約学会第43回大会で発表した原稿の約三分の一の第一部、第二部である。残りの第三部「ガラテア書の修辞学的分析」は稿を改めて『新約学研究』第32号（2004年）に掲載予定。尚、第一部は拙稿の書評「山内眞著『ガラテア書』」『日本の神学』第42号（2003年）、132-137頁での議論を補うものである。

（1）H. D. Betz, "The Literary Composition and Function of Paul's Letter to the Galatians," *NTS* 21 (1975), 353-379 =M. D. Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, Minneapolis: Fortress, 2003, 3-28; idem, *Galatians: A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, Philadelphia: Fortress, 1979; cf. idem, "Geist, Freiheit und Gesetz: Die Botschaft des Paulus an die Gemeinden in Galatia," *ZTK* 71 (1974), 78-93; idem, "In Defense of the Spirit: Paul's Letter to the Galatians as a Document of Early Christian Apologetics," E. Schüssler-Fiorenza (ed.), *Aspects of Religious Propaganda in Judaism and Early Christianity*, Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1976, 99-114.

（2）古代から近世までのガラテア書の修辞学的解釈の代表例、紀元4世紀の最古のパウロ書簡注解者であるラテン教父ヴィクトリヌス、ギリシア教父クリュソストモス、ならびに宗教改革者メランヒトンの註解書については、以下を参照。ヴィクトリヌス、cf. F. F. Bruce, "Marius Victorinus and His Works," *EvQ* 18 (1947), 132-143; S. A. Cooper, "*Narratio and Exhortatio* in Galatians According to Marius Victorinus Rhetor," *ZNW* 91 (2000), 107-135. クリュソストモス、cf. J. Fairweather, "The Epistle to the Galatians and Classical Rhetoric: Parts 1 & 2," *Tyn*B 45 (1984), 1-38; idem, "The Epistle to the Galatians and Classical Rhetoric: Part 3," *Tyn*B 45 (1984), 213-243; R. Staats, "Chrysostomos über die Rhetorik des Apostel Paulus: Makaranische Kontexte zur "De Sacerdotio IV. 5-6," *VC* 46 (1992), 225-240; M. M .Mitchell, *The Heavenly Trumpet: John Chrysostom and the Art of Pauline Interpretation*, Tübingen: Mohr, 2000; idem, "Reading Rhetoric with Patristic Exegetes: John Chrysostom on Galatians," A. Y. Collins & M. M. Mitchell (eds.), *Antiquity and Humanity: Essays on Ancient Religion and Humanity. Presented to H. D. Betz on His 70th Birthday*, Tübingen: Mohr, 333-355. メランヒトン、cf. C. J. Classen, "Paulus und die Rhetorik," *ZNW* 82 (1991), 1-33; idem, "St Paul's Epistle and Ancient Greek and Roman Rhetoric," S. E. Porter and T.H.Olbricht, *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993, 265-291＝Nanos, *The Galatians Debate*, 73-94; Cf. F.Young, "The Rhetorical Schools and Their Influence on Patristic Exegesis," R.Williams (ed.), *The Making of Orthodoxy: Essays in Honour of Henry Chadwick*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989, 182-199.

（3）1990年代前半までの研究状況については以下が基本的である、cf. Watson & Hauser, *Rhetorical Criticism*, 194-198; S. E. Porter, "Paul of Tarsus and His Letters," idem (ed.), *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330* B.C.- A.D.400, Leiden: Brill, 1997, 533-585; 最近までの研究状況については以下が有益である、 cf. D. Sänger, "'Vergeblich bemüht' (Gal 4.11)?: Zur paulinischen Argumentationsstrategie im Galaterbrief," *NTS* 48 (2002), 377-399; M. D. Nanos, *The Irony of Galatians: Paul's Letter in First Century Context*, Minneapolis: Fortress, 2002; idem (ed.), *The Galatians Debate*.

（4）J. B. Lightfoot, *St.Paul's Epistle to the Galatians*, London: Macmillan, 1865, chs.1-2 "narrative,"

chs.3-4 "argumentative," chs.5-6 "hortatory." ライトフットからベッツまでの註解書は基本的には、この三区分に従っている。

(5) Betz, "Composition" & *Galatians*: 1:1-5 (the prescript), 1:6-11(exordium: 10-11, transitio), 1:12-2:14 (narratio), 2:15-21 (propositio), 3:1-4:31 (probatio), 5:1-6:10 (exhortatio), 6:11-18 (the postscript = conclusio).

(6) H. Hüner, "Der Galaterbrief und das Verhältnis von antiker Rhetorik und Epistolographie," *TLZ* 109 (1984), 241-250; Classen, "Paulus," ; idem, "St.Paul's Epistle."

(7) W. Wuellner, "Toposforschung und Torahinterpretation bei Paulus und Jesus," *NTS* 24 (1978), 463-483: 1:1-5 (the prescript), 1:6-12 (exordium), 1:13-6:10 (argumentatio; ① 1:13-2:21; ②3:1-4:31 (Hauptteil); 〔③5:1-6:10(?)〕; 6:11-17(peroratio); 〔6:18 (the postscript)〕.

(8) J. D. Hester, "The Rhetorical Structure of Galatians 1:11-2:14," *JBL* 103 (1984), 223-233: 1:1-5 (the prescript), 1:6-10 (exordium), 1:11-12 (stasis), 1:13-14 (transitio), 1:15-2:10 (narratio), 2:11-14 (digressio or egressus); idem, "The Use and Influence of Rhetoric in Galatians 2:1-14," *TZ* 42 (1986), 386-408.

(9) J. D. Hester, "Placing the Blame: The Presence of Epideictic in Galatians 1 and 2," D. F. Watson (ed.), *Persuasive Artistry: Studies in New Testament Rhetoric in Honor of George A. Kennedy*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991, 281-307; idem, "Epideictic Rhetoric and Persona in Galatians 1 and 2," Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 181-198.

(10) T. Martin, "Apostasy to Paganism: The Rhetorical Stasis of the Galatian Controversy," *JBL* 114 (1995), 437-461= Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 73-94; 1:1-5 (epistolary prescript), 1:6-9 (the body-opening), 1:10-6:10 (body-middle arguments; ① 1:10-2:21, ② 3:1-4:7, ③ 4:8-20, ④ 4:21-5:6, ⑤ 5:7-10, ⑥ 5:11-6:10), 6:11-17 (body-closing), 6:18 (farewell); cf. idem, "Pagan and Judeo-Christian Time Keeping Schemes in Gal.4:10 and Col.2:16," *NTS* 42 (1996), 120-132.

(11) G. A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*, Chapel Hill, Univ. of North Carolina Press, 1984, 144-152: 1:1-5 (salutation), 1:1-6 (proem), 1:11-12 (1st heading), 1:13-2:14 (proof), 2:15-21 (epicheireme, conclusion of 1st heading), 3:1-5 (2nd heading), 3:6-4:11 (arguments based on evidence), 4:12-20 (personal appeal), 4:21-5:1 (allegorical interpretation), 5:2-6:10 (exhortation), 6:11-18 (epilogue).

(12) R. Hall, "The Rhetorical Outline for Galatians: A Reconsideration," *JBL* 106 (1987), 277-287, = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 29-38: 1:1-5 (salutation/exordium), 1:6-9 (proposition), 1:10-6:10 (proof; 1:10-2:21 〔narration〕, 3:1-6:10 〔further headings〕, 6:11-18 (epilogue); cf. idem, "Historical Inference and Rhetorical Effect: Another Look at Galatians 1 and 2," Watson (ed.), *Persuasive Artistry*, 308-320; idem, "Arguing Like an Apocalypse: Galatians and an Ancient *Topos* Outside the Greco-Roman Rhetorical Tradition," *NTS* 42 (1996), 434-453.

(13) F. J. Matera, *Galatians*, Collegeville: Liturgical , 1992; B. Witherington, *Grace in Galatia: A Commentary on St Paul's Letter to the Galatians*, Grand Rapids: Eerdmans, 1998.

(14) J. Smit, "The Letter of Paul to the Galatians: A Deliberative Speech," *NTS* 35 (1989), 1-26 (p.3) = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 39-59: 1:6-12 (exordium); 1:13-2:21 (narratio), 3:1-4:11 (confirmatio), 4:12-5:12 (conclusio; ① 4:12-20,conquestio, ② 4:21-5:6, enumeratio, ③ 5:7-12, indignatio), 5:13-6:10 (later addition), 6:11-18 (amplicatio).

(15) J. Vos, "Paul's Argumentation in *Galatians* 1-2," *HTR* 87 (1994), 1-16 = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 169-180: 1:1-5 (epistolary prescript), 1:6-9 (propositio), 1:10-12

(enthymematic confirmatio), 1:13-2:14 (21) (narrative confirmatio).

(16) R. N. Longenecker, *Galatians*, Waco: Word, 1990: I 1:1-5 (salutation), II 1:6-4:11 (rebuke section; A 1:6-10, issues at stake (exordium), B 1:11-2:14, autobiographical statements in defense (narratio), C 2:15-21, the proposition of Galatians (propositio), D 3:1-4:11, arguments in support (probatio)), III 4:12-6:10 (request section; A 4:12-5:12, exhortations against the Judaizing threat (exhortatio, pt.1), B 5:13-6:10, exhortation against Libertine tendencies (exhortatio, pt.2), IV 6:11-18 (subscription).

(17) K. A. Morland, *The Rhetoric of Curse in Galatians*, Atlanta: Scholars Press, 1994: 1:1-12 (exordium), 1:13-2:14 (narratio), 2:15-21 (transitio; propositio), 3:1-4:11 (probatio), 4:12-20 (transitio), 4:21-31 (transitio), 5:1-12 (dissuatio), 5:13-6:10 (parenesis), 6:11-18 (peroratio).

(18) J. Schoon-Jansen, *Umstrittene 'Apologien' in Paulusbriefen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991; cf. U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (4.Aufl.), Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2002, 119.

(19) Hester, "Placing the Blame" : 1:11-12 (prooimion), 1:13-14 (genos), 1:15-17 (anastrophe), 1:18-24 (praxeis), 2:1-14 (sugkrisis).

(20) R. Hall, "Arguing Like an Apocalypse."

(21) K. A. Morland, *Rhetoric of Curse.*

(22) P. E. Koptak, "Rhetorical Identification in Paul's Autobiographical Narrative," *JSNT* 40 (1990), 97-113 = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 157-168.

(23) J. M. G.Barclay, "Mirror-Reading a Polemical Letter: Galatians as a Test Case," *JSNT* 31 (1987), 73-93 = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 367-382.

(24) B. C. Lategan, "The Argumentative Situation of Galatians," *Neotest* 26 (1992), 257-277 = Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, 383-395.

(25) B. C. Lategan, "Is Paul Defending His Apostleship in Galatia?" *NTS* 34 (1988), 411- 430.

(26) A. du Toit, "Vilification as a Pragmatic Device in Early Christian Epistolography," *Bib* 75 (1994), 403-412.

(27) L. Thurén, "Was Paul Angry? Derhetorizing Galatians," S. E. Porter & D. L. Stamps (eds.), *The Rhetorical Interpretation of Scripture: Essays from the 1996 Malibu Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999, 302-320, esp.312.

(28) Nanos, *The Irony of Galatians.*

(29) I. G. Hong, *The Law in Galatians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993.

(30) Morland, *The Rhetoric of Curse.*

(31) Thurén, "Was Paul Angry?"

(32) Classen, "Paulus," & "St.Paul," cf. idem, *Rhetorical Criticism of the New Testament*, Tübingen: Mohr, 2000; Hübner, "Der Galaterbrief."

(33) S. E. Porter, "The Theoretical Justification for Application of Rhetorical Categories to Pauline Epistolary Literature," Porter & Olbricht, *Rhetoric and the New Testament*, 100-122; idem, "Paul as Epistographer and Rhetorician? Implications for the Study of the Paul of Acts," *The Paul of Acts: Essays in Literary Criticism, Rhetoric, and Theology*, Tübingen: Mohr, 1999, 98-125; J. T. Reed, "Using Ancient Rhetorical Categories to Interpret Paul's Letters: A Question of Genre," Porter & Olbricht (eds.), *Rhetoric and New Testament*, 292-324.

(34) Fairweather, "The Epistle to Galatians and Classical Rhetoric."

(35) R. D. Anderson, *Ancient Rhetorical Theory and Paul*, Kampen: Pharos, 1996; P. H. Kern,

Rhetoric and Galatians: Assessing an Approach to Paul's Epistle, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1998.

(36) G. A. Kennedy, *Progymnasmata: Greek Textbooks of Prose Composition and Rhetoric*, Atlanta: Society of Biblical Literature, 2003, ix.

(37) L. Spengel (ed.), *Rhetores Graeci*, vols. 3, Leipzig: Teubner, 1854-56, vol.2, 59-130; M. Patillon & G. Bolognes (eds.), *Aelius Théon: Progymnasmata*, Paris: Les Belles Lettres, 1997; Kennedy, *Progymnasmata*, 3-64, cf. (Armenian addition) 64-72.

(38) H. Rabe (ed.), *Hermogenis Opera*, Leipzig: Teubner, 1913 (1969), 1-27; C.H.Baldwin, *Medieval Rhetoric and Rhetoric*, New York: Macmillan, 1928, 23-38; Kennedy, *Progymnasmata*, 74-88.

(39) Spengel, *Rhetores Greaci*, vol.2, 21-56; H. Rabe, *Aphthonii Progymnasmata*, Leipzig: Teubner, 1926, 1-51; R. Nadeu, "Progymnasmata of Aphthonius," *Speech Monographs* 19 (1952), 264-285; P. B. Matsen, "Progymnasmata of Aphthonius," P. B. Matsen, P. Rollinson & M.Sousa (eds.), *Readings from Classical Rhetoric*, Carbondale: Southern Illinois Univ. Press, 1990, 266-288; Kennedy, *Progymnasmata*, 96-127.

(40) J. Felton (ed.), *Nicolai Progymnasmata*, Leipzig, 1913, 1-79; Kennedy, *Progymnasmata*, 131-172.

(41) M. Heath, *Hermogenes On Issues*, Oxford: Clarendon Press, 1995.

(42) J. Fairweather, *Seneca the Elder*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1981, 104ff.

(43) 「寓話」, Aristotle, *Rhet.*, 2.20; 「陳述」, Ps.Cicero, *Rhet.Her.*, 1.12, Cicero, *Inv.*, 1.27; 「格言」,Aristotle, *Rhet.*, 2.21, Ps.Cicero, *Rhet.Her.*, 4.56-57; 「共通の場」, Aristotle, *Rhet.*,2.18, Ps.Cicero, *Rhet.Her.*, 2.9, 2.30.48-49, Cicero, *Inv.*, 2.77; 「称賛・非難」, Aristotle, *Rhet.*, 1.9.33; 「比較」, Aristotle, *Rhet.*, 3.10; 「描写」, Aristotle, *Rhet.*, 3.2.

(44) H. I. Marrou, *A History of Education in Antiquity*, London: Univ. of Wisconsin Press, 1982 (1948, =ET 1956), 172-175, 197-205. M. L. Clarke, *Rhetoric at Rome*, London/New York: Routledge, 1996 (1953), 7, 16, 121.

(45) Aphthonius, Rabe, 73-75; Kennedy, *Progymnasmata*, 91-92.

(46) Cf. Kennedy, *Progymnasmata*, 175-177.

(47) B. Mack & V. K. Robbins, *Patterns of Persuasion in the Gospels*, Sonoma, Polebridge, 1989; R. F. Hock & E. N. O'Neil (eds.), *The Chreia in Ancient Rhetoric*, vol.1, The *Progymnasmata*, Atlanta: Scholars Press, 1986; vol.2, *The Chreia and Ancient Rhetoric: Classroom Exercises*, Atlanta: Society of Biblical Literature, 2002.

(48) M. Hengel, "Der vorchristliche Paulus," M. Hengel & U. Hekkel (eds.), *Paulus und das antike Judentum*, Tübingen: Mohr, 1991, 177-293.

(49) W. Wuellner, "Der vorchristliche Paulus und die Rhetorik," S. Lauer & H. Ernst (eds.), *Tempelkult und Tempelzerstörung: Festschrift für Clements Thoma zum 60. Geburtstag*, Bern: Peter Lang, 1995, 133-165.

(50) Teon, Spengel, 93-94; Kennedy, *Progymnasmata*, 40-42, esp. comment on p.40.

(51) Hermogenes, Rabe 11; Kennedy, *Progymnasmata*, 79.

(52) Aphthonius, Rabe 10-16, Spengel 27-32; Kennedy, *Progymnasmata*, 10-105, esp.101, 103.

(53) Nicolaus, Felton 29-35; Kennedy, *Progymnasmata*, 144-147, esp.145.

(54) Theon, Spengel, 120-128, esp.120; Kennedy, *Progymnasmata*, 55-61, esp.55.

(55) Hermogenes, Rabe, 24-26, esp.24; Kennedy, *Progymnasmata*, 87-88, esp.88.

(56) Aphthonius, Spengel, 49-53; Rabe, 41-46; Kennedy, *Progymnasmata*, 120-124.

(57) Nicolaus, Felton, 71-76, esp.71-72; Kennedy, *Progymnasmata*, 168-171, esp.168.

(58) Cf., C. Forbes, "Comparison, Self-Praise and Irony: Paul's Boasting and Convention of Hellenistic Rhetoric," *NTS* 32 (1986), 1-30.

(59) Theon, Spengel, 112-115, esp.112; Kennedy, *Progymnasmata*, 52-55, esp.52.

(60) Aphthonius, Spengel, 42-44, esp.42, Rabe, 31-33, esp.31; Kennedy, *Progymnasmata*, 113-115, esp.113.

(61) Nicolaus, Felton, 59-63; Kennedy, *Progymnasmata*, 162-164.

(62) 以下に続く第三部「ガラテア書の修辞学的分析」は原稿用紙約100枚であるが、それを約半分にして書き改めたものは『新約学研究』第32号に続く。その際に、文体などで用いられている修辞法（elocutio）を従来の修辞学的ハンドブックを用いて分析した詳細な点は、紙幅の関係で別の機会に譲ることにし、省略させて頂いた。